

# 専門課程担当講師を対象とした 学習目標と評価の一致を図る授業設計の実践と支援計画

Practice & planning of teacher training to match learning goals & assessments for specialized course

土屋 理恵, 平岡 斉士

Rie TSUCHIYA, Naoshi HIRAOKA

熊本大学 教授システム学研究センター

Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

<あらまし> ある専修学校の専門課程では、授業の質の向上を図るべく、メーガーの3つの質問を指針にした集合研修を経て各講師が学習目標、評価設定、授業計画の策定を行い2019年度前期のスタートをきった。この取り組みにより提出された授業計画は全体的に前年度までのものより詳細に立てられていた。一方学習目標については、具体的で評価に直結した目標が増えたものの、授業活動の範囲を超えた将来的なことを設定しているもの、範囲が広すぎて具体性に欠けるもの、設定自体が高すぎて実現可能性の低いもの等が含まれており、継続して取り組むべき課題であることがわかった。

<キーワード> 学習目標、評価設定、授業設計、メーガーの3つの質問、教師教育

## 1. はじめに

ある専修学校の専門課程では、学期末のテストおよび成績確定の際に毎回以下のような問題を含む科目が散見された。それらの科目を担当する講師自身も問題意識を持ちながらもなかなか改善にいたらない現状があった。

- 1) クラスの大半が比較的低い水準の点数をとり高得点をとる学生が極端に少ない
- 2) 授業での取り組みに差があるにも関わらずテストではクラスの殆どが高得点をとる
- 3) テスト内容に学期内で扱った一部の内容しか反映されていない
- 4) 最後の授業をテスト対策としその内容さえ把握していればテストで高得点をとることができる

こうした問題は、授業計画を立てる際に評価計画がきちんと立てられていないことに起因していると考えられる。当該課程では各学期開始前に講師各自が担当科目の学習目標、評価計画、学期内の授業計画をクラスごとに策定することとなっているが、その計画自体が抽象的または大雑把な内容にとどまっていること、そして提出されたものについて組織として改善を求める動きをしてこなかったことが状況の改善に至らない要因として挙げられた。

そこで、授業計画策定に先立ち、学習目標の立て方やそれに対応した評価の設定方法について講師間で共通認識を持つこととした。評価まで含めて授業計画をしっかりと立てることができれば、授業の質の向上とともに的確な評価へとつながることが期待できる。

## 2. 目的

本研究は、当該専門課程の各科目の成績評価における問題点を改善することを目的とする。

2019年前期担当科目において学習目標と評価方法の一致を図り、適切なテスト作成と学期を通じた学生個々の取り組みの評価の実現を目指すものである。

## 3. 方法

2019年度前期の授業計画策定に先立ち、2019年3月の集合研修で授業計画についてのワークショップを実施した。対象講師は12名でインストラクショナルデザインにはほぼ触れたことのないメンバーで構成されている。

ワークショップでは、「どこへ行くのか：学習目標」「たどり着いたかどうかをどうやって知るか：評価方法」「どうやってそこへ行くのか：教授方略」という授業設計の考え方を示すメーガーの3つの質問（市川・根本 2016）に沿って自身の担当科目の授業計画を考えていった。

学習目標は、学習者を主語に「～できる」を語尾にして記述（稲垣・鈴木 2015）し、前期の授業を終えた時に学生が何ができるようになっていけばいいのかを可能な限り具体的に突きつめていくことに留意した。

評価方法の設定では、学習目標の1つ1つについてそれができたかどうかを確かめる機会を設定し、定期テストの他に小テストや実技、成果物等を含め何で測るのかを考えて合格基準を決めるよう勧めた。また成績確定には相対評価ではなく、努力して基準に達した学生は皆最高評価となる絶対評価を採用することを全体で確認した。

教授方略に関しては、集合研修の内容を踏まえて前期の各回の授業計画を立てることを集合研修の事後課題とした。その際に①学生たちが授業目標を意識できる工夫、②学生たちが自分自身の取り組みを実感できる機会の設定や方法の工夫、③学生たちにふり返りの機会を設定することについて考慮するよう促した。

そして評価をより明確にするために、また学期全体の授業活動を反映させたテストにするために5月のゴールデンウィーク明けまでに学期末テストの作成と提出を求めた。

#### 4. 結果と考察

2019年度前期開始前に提出された授業計画は全体的に前年度までのものよりも各回の授業計画について詳細に計画されており、学期末テスト以外に授業内で評価する項目やタイミングについても設定されていた。成績を確定する上で何を何パーセント考慮するかということに熟考した様子がうかがえた。

一方で、学習目標と対応させた評価基準・評価計画になっているかという点では課題が残る。

1科目につき複数個の学習目標が設定されていたが、設定されていた学習目標全74件のうち、評価方法の設定が困難なものが22件含まれていた（表1参照）。その他、設定された学習目標には複数の学習目標を1つの文に集約して示してあるものも少なくなかった。1つの文で1つの行動目標を示すことで曖昧さを回避でき、評価方法の設定も容易になるとと思われる。

評価計画が比較的練られていることを考えると、事後課題で授業計画を策定する際に学習目標と評価計画を切り分けて考えたことが推察できる。一度のワークショップで適切な学習目標が設定できるようになるとは考えにくい。講師間で互いの授業計画を共有したり意見交換をしたりする中で気づきを促すことが改善につながるものと考えられる。また、学習目標を設定する意義について理解を深めることも欠かせないであろう。学習目標と評価を連動して考えられるようにするために、授業計画の記入書式を改良することも検討していきたい。

表1：提出された学習目標の分類 n=74

分類	件数
1. 可能な限り具体的で評価に直結したもの	25
2. 多少曖昧さは残るが評価が明確なもの	27
3. 表現が曖昧で評価方法が定まらないもの	16
4. 学期内の授業では評価できないもの	1
5. 教師目線で設定されているもの	3
6. 設定が高すぎて達成の可能性が低いもの	2

ゴールデンウィーク明けの定期テスト提出については、12名中8名が提出した。提出した8名はいずれもテストを早期に作成したことにより授業で扱う内容が明確になったと述べている。今回は努力目標として案内したが、今後は徐々に学期はじめに学期末テストを作成する方向にシフトしていきたい。

#### 5. 今後の計画

2019年度前期開始から学期終了に向けての支援計画は表2のとおりである。

学期途中に省察の機会を設け学習目標・評価計画・授業計画・学期末テストを改めて見直す。同様に学生にも学期途中でそれまでの取り組みや成果等をふり返る機会を設定し、軌道修正のきっかけを作る。夏休みには担当科目について学期末に行う学生アンケートを作成し、学期終了後に各自テスト結果を踏まえた総合的なふり返りを経て改善へとつなげる計画である。

2019年度後期以降も継続的に取り組むことで授業計画の精度を上げ、学校全体として段階的に授業の質を高めていきたいと考えている。

表2：2019前期支援計画

<時期>	<支援内容>
3月	[step1:学習目標と評価の一致] ・学習目標の立て方、学習目標を達成したことを測る評価設定のためのワークショップ（集合研修） ・授業計画策定（事後課題として）
5月	[step2:テスト作成] 前期末テスト問題を作成・提出（GW明け）
6月	[step3:講師の中間省察] 思い描いたクラス運営や授業運びができていないか/学生は自分の取り組み内容や現在の位置を把握できているか/作成した定期テストは授業全体を反映する内容か
7月	[step4:学生にふり返りの機会を設定] それまでの授業活動をふり返り、軌道修正の機会を設ける
8月	[step5:学生アンケートの作成] ・夏休み中に自身の担当科目について、授業改善に役立つようなアンケートを作成し互いに共有する ・後期科目の授業計画策定
9月	[step6:省察] 前期授業についてのふり返りと改善

#### 参考文献

- 市川尚・根本淳子編著（2016）インストラクショナルデザインの道具箱 101, 鈴木克明監修, 北大路書房  
 稲垣忠・鈴木克明編著（2015）授業設計マニュアル Ver.2—教師のためのインストラクショナルデザイン, 北大路書房